

## 「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」

マタイの福音書 5 章 33-37 節

### はじめに

私がウェルカム・サンデーで説教をさせていただく時には、マタイの福音書 5-7 章に書かれているイエス様の説教からお話することになっています。この説教は、山の上で語られたので「山上の説教」と呼ばれています。

今お読みした聖書箇所、イエス様は「誓うこと」について教えておられます。「誓う」というのは、基本的には「約束する」ことですが、単なる約束よりはもう少し強く「固く約束する」という意味のようです。

キリスト教ではあらゆる場面で「誓い」をします。結婚式の時に新郎新婦は「互いの愛」を誓います。また洗礼を受ける時、教会員になる時、教会学校の教師になる時、牧師や長老や執事などの教会役員になる時などに「誓約」をします。

キリスト教での「誓い」は、神様を証人として、神様の御前で、神様の名前によって誓うものです。神様は、「十戒」において「**あなたの神、主の名をみだりに口にしてはならない。主は、御名をみだりに口にする者を罰せずにはおかない**」(出エジプト記 20:7)とされていますから、もし「誓い」を破った場合には神様からの罰や裁きも受ける、そういう覚悟をもって「固く約束する」のが、キリスト教における「誓い」と言えます。

### 1. 当時の人々の誓い

しかしイエス様は、34-36 節でこのように言われます。「**しかし、わたしはあなたがたに言います。決して誓ってはいけません。天にかけて誓ってはいけません。そこは神の御座だからです。地にかけて誓ってもいけません。そこは神の足台だからです。エルサレムにかけて誓ってもいけません。そこは偉大な王の都だからです。自分の頭にかけて誓ってもいけません。あなたは髪の毛一本さえ白くも黒くもできないのですから**」。

イエス様は、「決して誓ってはいけません」と言っておられます。キリスト教のある教派は、イエス様のこの言葉を文字通りに受け取って、教会の中でも社会の中でも一切誓わないとしています。しかしイエス様は、すべての「誓い」を禁じているわけではないように思います。新約聖書を見ると、イエス様ご自身も誓っていますし（マタイ 26:63-64）、使徒パウロも誓っています（Ⅱコリント 1:23、ガラテヤ 1:20）。

イエス様がここで「決して誓ってはいけません」と言っているのは、当時の人々がしていた「誓い」に対してです。当時の人々は、「天にかけて」誓ったり、「地にかけて」誓ったり、「エルサレム」にかけて誓ったり、「自分の頭にかけて」誓ったりしていました。

当時の人々が、「天」とか「地」とか「エルサレム」とか「自分の頭」にかけて誓ったのは、神様の名前にかけて誓うことを避けるためでした。神様の名前にかけて誓ったことは、絶対に果たさなければなりません。もし果たさなかったら罰や裁きを受けることになります。ですから神様の名前以外の「天」とか「地」とか「エルサレム」とか「自分の頭」にかけて誓って、必ずしも果たさなくてもよい「誓い」、果たさなくても罰や裁きを受けない「誓い」というものを設けたのです。

そして、このような「緩い誓い」を設けて、当時の人々は「誓い」というものを軽んじるようになっていたのです。「誓い」というのは本来、必ず果たさなければならぬものです。しかし、このような「緩い誓い」を設けることによって、果たすつもりもなく、ただ言葉だけで「誓う」ということがなされていたのです。

## **2. 天も地もどこでも神の御前である**

このような当時の人々の「誓い」に対して、イエス様は「決して誓ってはいけません」と言われたのです。なぜなら、たとえ「天にかけて」誓っても、「地にかけて」誓っても、「エルサレムにかけて」誓っても、「自分の頭にかけて」誓っても、それらはどれも「神様の御前」における誓いになるからです。「天」は「神の御座」であり、「地」は「神の足台」であり、「エルサレム」は「神の都」です。また私たち人間は神様に造られたので、私たちの「頭」も「神の作品」です。

「天」も「地」もその中のあるすべての物も、すべて神様に造られたものです。そこには「made in God」という刻印があるのです。その意味で、たとえ神様の名前を使わなくても、それらにかけて誓うなら、それは「神様の名前」で誓っていることになるのです。ですからたとえ「天」や「地」や「エルサレム」や「自分の頭」にかけて誓った「誓い」でも、絶対に果たさなければならぬ「誓い」であり、もし果たさなかったら罰や裁きを受けることになる「誓い」なのです。ですからイエス様は、必ず果たすつもりもない「誓い」なら誓わないほうがよいと言われるのです。それは、自分の身に裁きや罰を招くものになるからです。

## **3. 誓いに誠実であること**

イエス様は37節でこう言われます。「**あなたがたの言うことばは、『はい』は『はい』、『いいえ』は『いいえ』としなさい。それ以上のことは悪い者から出ているのです**」。イエス様はここで、私たちの「言葉」と「心の思い」、そして「行い」を一致させるようにとされているのではないのでしょうか。言葉で「はい」と言ったにも拘らず、心の中では「はい」と思っていない、あるいは言葉で「はい」と言ったにも拘らず、実際に「はい」と言ったことを実行しない、そうであってはならないと言っておられるのではないのでしょうか。またもし心の中で「いいえ」と思っているなら「はい」と言ってはならない、実際に実行できないことは「はい」と言ってはならない、心の中で「いいえ」と思っているなら、また実際に実

行できないと思っているなら、最初から「いいえ」と言うべきだと言われているのではないのでしょうか。

日本人には、「本音と建前」や「社交辞令」というものあり、「心の思い」と「言葉」と「行い」がバラバラであり、外国人の方はそれに戸惑うとよく言われます。しかしイエス様は、「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」であるように、つまり「心の思い」と「言葉」と「行い」を一致させるようにと言われます。自分の心の中で思うことを言葉にし、言葉にしたことを責任をもって実行するようと言われます。また心の中で思っていないことを言葉にしたり、責任をもって実行できないことを言葉にしたりしないようにと言われます。

「誓い」について言うならば、一度誓ったならば、それを必ず果たさなければならない、「はい」は「はい」でなければならない、「はい」と言ったのに「いいえ」であってはならないということです。また果たすつもりがないもの、果たす力がないものは、最初から「いいえ」と言いなさいということです。つまりイエス様は、自分の「誓い」に誠実であるように、もっと言えば、自分の「言葉」に責任を持つようにと言われているのです。

## **おわりに**

イエス様は、「誓い」に誠実であること、「言葉」に責任を持つことを私たちに求めておられます。なぜなら神様ご自身が、またイエス様ご自身が「誓い」に誠実であり、「言葉」に責任を持たれる方だからです。使徒パウロは、このように言いました。**「私たち、すなわち、私とシルワノとテモテが、あなたがたの間で宣べ伝えた神の子キリスト・イエスは、『はい』と同時に『いいえ』であるような方ではありません。この方においては『はい』だけがあるのです。神の約束はことごとく、この方において『はい』となりました。それで私たちは、この方によって『アーメン』と言い、神に栄光を帰するのです」**( II コリント 1:19-20)。

イエス様は「はい」は「はい」である方です。言葉にしたことを必ず実行される方です。約束したことを必ず果たされる方です。さらにイエス様は、神様が約束されたことを、この世において実現された方です。神様は旧約聖書において、救い主を遣わすと約束されました。そしてイエス様を遣わし、私たちの罪のために十字架に架かり、私たちの罪を贖い、私たちに救いの道を開いてくださいました。そしてイエス様は新約聖書において、ご自身が世の終わりに最後の審判のため、また私たちの救いの完成のために再び来られると約束しておられます。

聖書は、一言で言って「神様の約束」が書かれている書物です。その約束とは、神様はイエス様を信じる者を義と認め、神様はイエス様を信じる者の神また父となり、イエス様を信じる者は神様の民また子どもとなるというものです。キリスト教は、「神様の約束」に対する「人間の信仰」によって成り立っています。もし神様が、「約束」を守らない方であつたら、私たちの「信仰」は全く空しいものです。私たちは、神様が「約束」を守る方であると信じ、その神様を信じる私たちも「約束」を守るのです。

私たちは、「約束」や「誓い」に誠実でなければなりません。私たちは教会の中だけでなく、家庭や学校や職場など様々な場面で、「約束」をし、「誓い」ます。私たちは、それらの「約束」や「誓い」に誠実であることで、神様を証しするのです。私たちが「約束」や「誓い」に誠実であることで、私たちよりも遥かに「約束」や「誓い」に誠実な神様の姿を映し出すのです。それが「神様の栄光を現す」ということです。

イエス様は私たちに、「**あなたがたは地の塩です**」(マタイ 5:13)「**あなたがたは世の光です**」(マタイ 5:14)「**人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるように**」(マタイ 5:16)と言われます。私たちの「良い行い」の一つは、「約束」や「誓い」に誠実であり、必ず守ることです。私たちは、そのことを通して「地の塩」「世の光」として歩むことができ、そのことを通して人々が神様をあがめるようになることを求めていくのです。

私たちは、「約束」や「誓い」に誠実であったでしょうか。私たちは、多くの人と数え切れない「約束」を交わしてきたでしょう。また結婚する時、洗礼を受ける時、教会員になる時、教会学校の教師になる時、牧師や長老や執事などの教会役員になる時に、「誓い」をしてきたでしょう。この地上で私たちがしてきた「約束」や「誓い」はすべて、「神様の御前」で、「神様の名前」でなされたものです。天も地もその中のあらゆる物はすべて神様が造られたものです。ですから、どこで誰と「約束」し「誓い」をしようとも、それらはすべて「神様の御前」で、「神様の名前」で「約束」し「誓った」ものです。ですから、果たさなくてよい、守らなくてよい「約束」や「誓い」など、一つもありません。

私たちは、自分が「約束」や「誓い」に誠実であればあるほど、「神様の約束」に対する信仰を強めていきます。自分でさえ、「約束」や「誓い」に誠実であれば、神様はどれほど私たちへの「約束」に誠実であるかという確信が強められます。逆に、私たちが「約束」や「誓い」にいい加減であれば、神様も私たちへの「約束」にいい加減かもしれないという不信仰に陥っていきます。

私たちは、心の思いと言葉と行いを一致させる努力をしていきましょう。自分の心に思ったことだけを言葉にし、言葉にしたことを責任を持って果たしていきましょう。「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」でありましょう。そうすれば私たちは、人々からの信頼を勝ち取り、人々に神様を証し、私たち自身の信仰を強めることになるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたは「約束」に誠実な方であり、「約束」されたことを必ず実現される方です。聖書は、「神様の約束」の書物です。それらの「約束」を、私たちが心から信じることができすように。また神様の子どもとされた私たちも、「約束」や「誓い」に誠実に歩み、あなたを証し、あなたの「約束」に対する信仰を強めていくことができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈ります。アーメン。